

《指導助言》

◎廣瀬 諤（那賀高等学校教頭）

徳島北高校の宮武先生には、新型コロナウイルスの影響による臨時休業等があった中での研究発表、本当にご苦労様でした。

今回宮武先生は、『考える力』の育成・読むことの指導に重点をおいて」というテーマで研究に取り組みました。先生がこのテーマを選んだ理由は、「2 研究動機」に書かれていますが、宮武先生が感じているような『文章を読んで考える』ことが苦手な生徒が多くなっている」という感覚は、学校を超えて、国語科教員が抱える共通の課題と言ってもいいのではないでしょうか。また、こうした「考える力」を生徒に身につけさせたいけれども、いわゆる受験に必要な学力も身につけさせなければいけないというようなジレンマに悩んでいる先生方も多いことと推察します。

本来こうした「考える力」は「受験に必要な学力」であるはずなのですが、受験国語では、生徒個々に対して「自由に独創的に」考えて答えさせるような問題はほとんど出題されません。そのため私たち国語教員は、宮武先生のように「自由に考える」ことの面白さや意義深さを教えたいという気持ちと、いわゆる受験指導のはざまでジレンマを感じるようになるのだと思います。

さて、こうした葛藤の中、宮武先生は、この「考える力」を新学習指

導要領にある「創造的に考える力」と捉え、「他者の考えと自分の考えを吟味したり検討したりすることを通して、自分で新しい考えや発想を生み出す」手法の一つである「ジグソー法」を用いて、生徒に「考える力」を身につけさせたいと実践に取り組みました。この「ジグソー法」とは、先生が書かれているとおり、「学習者同士が協力し合いながら学習を進めていく学習法」のことであり、アクティブ・ラーニングの一つです。私も授業で付箋を使ったグループワークなどをよく行うのですが、「ジグソー法」については不明にしてよく知りませんでした。

「ジグソー法」の面白さは、「エキスパート活動」「ジグソー活動」「クlostーク活動」の三つのステップから成り立っているところでしょう。特に「エキスパート活動」では、自分に与えられた「問い」について、共通の「問い」を与えられた生徒とグループになり、協働しながら「深く」考えることができます。エキスパート活動を通して見出した「答え」は、もとのグループでそれぞれの「問い」の「エキスパート」からグループのメンバーに伝えられ、「課題（大きな問い）」『山月記』の場合は主題」をもとのメンバーで解決するといった流れになります。それぞれの「エキスパート」は、「エキスパート活動」での内容を、的確にもとのグループに伝えなくてはならないため、責任も生まれますし、的確に伝える表現力も求められます。こうした活動は、現行の国語科の学習指導要領の目標である「国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊

かにし……」に沿った内容と言えますし、新学習指導要領の目標である「生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばす」にも沿った活動だと思います。

この活動の中で、宮武先生が生徒に強調した「根拠を明らかにする」ということに、私自身は感銘を受けました。「ここの表現から私はこう考えた」、「私がこのように考えたのは、この表現があったからだ」といったように「根拠を明らかにする」ことは、物事を客観的に捉える際に重要なことです。コロナ禍の中、「エビデンス」という言葉を頻繁に耳にしますが、自分勝手な憶測や当て推量の考えでは、物事を的確に理解することが難しく、時に人を誤った行動に走らせるため、「根拠」を明らかにすることが求められているでしょう。国語科の目標の中にも、「的確に理解する能力を育成」とありますが、「的確に理解する」ためには、「根拠」をもとに考える活動が重要になってきます。宮武先生が生徒への指導は、この点でも、的を射たものであり、素晴らしいと思いました。

こうした活動が、どれほど生徒の「考える力」を伸長させたかは、「4 成果と課題」で示された生徒の一読後の感想と「ジグソー法学習後の感想」を読むと明らかです。他者の読みを知ることにより、「視点」を変えることができ、「新しい解釈」を生み出せたと答える生徒や、自分の中にいる「虎」の正体について思いをはせる生徒の意見を読むと、「ジグソー法」のような協働活動が生徒の「考える力」をいかに伸ばすかが

分かります。

こうした効果のある「ジグソー法」ですが、一方で、担当した「問い」の理解は深まるかもしれませんが、それ以外の「問い」については、他者の意見にひきずられてしまい自分の考えが深まらないこともあるかもしれないという危惧も抱きました。これについては、「問い」を交替するなどの方法も考えられますが、実際には、授業時間の都合で難しいでしょう。宮武先生も書かれています。こうしたデメリットについては、授業者が常に意識しながら授業を進めていく必要があると思います。兎にも角にも新しい手法を用いることはトライアルとエラーの繰り返しだと思いますので、日々「改善」の意識を持って取り組んでいくことが大切なのではないでしょうか。

来年度からは、徳島GIGAスクール構想が推進され、生徒ひとりひとりにタブレットが配付されることとなります。私たち国語教員も、生徒の学力を向上させ、興味関心を引き出すためにはこうした「ツール」を有効に使うことが求められています。こうしたツールはICT機器のような機械ばかりと限りません。新しい授業の手法なども「ツール」だと思います。私を含めた国語科の各先生方が、宮武先生のように新しい「ツール」を活用し、生徒の学力向上に向けて取り組んでいけることを期待しています。